

毎 日 新 聞

憂楽帳



事前指示書

在宅での「みとり」を取り上げたドキュメンタリー映画「けっぺいな町医者」（毛利安孝監督）が公開中だ。「穏やかな最期」を提唱する兵庫・尼崎の町医者、長尾和宏さん(62)の往診に焦点を当て、実際の患者たちの姿を描いた。

ある男性は10年以上前、病が進み自分が意思表示できなくなった時の医療をどこまで望むか、文書に記していた。「延命措置は一切おとわり」との直言を手書きした文面と、亡くなった直後の本人の映像。見る者の心を揺さぶる。父を思い出した。死の5カ月前の2017年

暮れ、医師に事前指示書を打診された。寝たきりになって14年。弱る中でも、しっかりと意思表示はでき、生きようとしている父と、死が前提の指示書についてどう話すのか。葛藤の中、どうしても切り出せず、指示書は作れなかった。

「死を考えるのは生きること一緒」と長尾さんが言う。父の14年間を振り返れば、生きることしか考えられないこともあるのだと、今の私は思う。でも、この長尾さんの問い。答えにたどり着くには簡単ではないだろうが、ずっと考えていくつもりだ。

【河出伸】

2021.3.10